

## 問題提起：メディアと日常

岩本 通弥  
IWAMOTO Michiya

本論集は日常と文化研究会が2016年9月3・4日、中国・北京大学で開催した、第2回国際シンポジウム「現代社会の日常を問う—メディアと日常」に基づき、それを組み直して再編集したものである。中国側発表者の論考の一部は次号に回した。また次号には、中国民俗学においてメディア論を語るには欠かすことのできない呂微論文と、本特集に関わる王傑文論文を翻訳掲載する。

第2回目の国際シンポジウムのテーマを「メディアと日常」としたことには、いくつかの理由がある。第一にはインターネットやケータイ（携帯電話）またSNSなど新しいメディアが、前世紀末から著しく発達したことである。それらメディア環境の急変が、私たちの日常を大きく変えつつあることは、誰しもが実感することだろう。通勤・通学の車中での光景や、若者の音楽や映像の消費形態は、わずか20年ほど前には想像もつかなかった。またこれまでのメディアと違い、発信者／受信者という枠を超え、双方向性や、のみならず、誰でもが新たな1対多というマスコミュニケーションの発信者になることを可能にした。モノのインターネット（IoT：Internet of Things）やウェアラブル・コンピュータが間近に迫り、ビックデータでマーケティングが読み解かれるほど、身の回りに張り巡らされた情報ネットワーク／情報管理社会の中で、私たちは今をどのように生きていくのだろうか。

これらを視野に収めない限りは、「日常と文化」という名の研究会は看板を下ろさなくてはならないが、第二の論点として、古いメディアといわれるテレビ・ラジオ・新聞などについても、東アジアの民俗学では積極的にこれらを研究対象とはして来なかった。メディア人類学がつとに唱えられてはいるながら、発展したのは映像人類学・民族誌映像の領域のみに限られている。社会学やカルチュラルスタディーズに遠慮したのか、民俗学でもまたフェイス・トゥー・フェイスの直接的な伝達過程という大前提があったのか、それらは未開地のまま放置されている。

しかしながら、テレビやラジオが今のニューメディアと同じくらいの衝撃で、私たちの日常を変貌させたことは、たやすく想像できることである。またネットが発達したといっても、今日、私たち“普通の人びと”の生活において、テレビがいかに大きな役割を果たしているか、ニュースの総覧性（世界で起きている出来事の全体的動きを一瞥すること）や、「想像の共同体」の装置として社会統合上の機能を果たしている現実も、その視野から落とすわけにはいかない。“普通の人びと”の日常生活を扱う民俗学は、そうした変化をきちんと把握していく必要があるだけでなく、ナラティブを扱うことに長けてきた民俗学には、新たな方法を切り拓く可能性があることも指摘しておきたい。

第三には上記二つの想定が全く予期できないような、「メディアと日常」のあり方を模索する方

向性も出てくる予感がある。人工知能（AI：Artificial Intelligence）が囲碁名人を破り、AIの書いた小説が文学賞の候補になったり、また自動運転車が当たり前となってくる時代、いかにAIと共存できるかなど、まさにその端境期に生きる私たちには、予想外の課題も見込んでおく必要がある。本号はそうした議論の叩き台として、新しい議論の布石を打っておくことも目指している。